

農村生活研究以前

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	安田, 誠三
巻/号	32号
掲載ページ	p. 1-5
発行年月	1972年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農村生活研究以前

農業技術協会 安田 誠 三

1.

半生を農政の一局面の行政にたづさわってきて、いまなお去来するいくつかの問題をかかえている不甲斐なさを嘆ずることがある。たとえば、農政の日本的な性格は何かとか、タテマエの農政と実際の場での農政の現実との矛盾、また農政の実際の諸策のなかで農村、農家は一体どう扱われてきたのかなど。これらの問題は農業の発達と農政についての史的な検証のなかでさぐられるべきであると思うだけに、それは容易なことでないが、ともかくいつもマクロの政策の側にたっていると、ミクロの農家・村といった問題についての現実認識がおろそかになりがちである。戦後農家とか村を意識した行政や研究の成果が蓄積されてきていることは、これまでのマクロの農政の対極として新しい局面のごとく思われる。

以下は、両極に視点をおきながら、農村生活の周辺、生活研究以前ともいべきことについての断想を書いたものである。

2.

明治・大正・昭和の戦前の農政は、政治（行政）の側から農業・村・民を増産（生産）にかりたててきたという沿革がある。それとひきかえに農村・民はつねに救済と保護思想をふくんだ慈恵政策の対象とされてきたという事実がある。そこには政策の論理がなくて救済さるべき農村の実情があることで成り立ってきたと思われるふしがある。

明治政府の政治体制が出来上る20年代を経て、農業の地位が国の経済の上で一転機を迎えようとする明治30年代を中心とした諸農制の整備と、第一次大戦後の経済発展期に対応した食糧増産の農政のふくらみをうけて、農林省が農商務省から分岐独立して、独自の農政が仕上げられていく路線をつないでみると、農政を一貫している政策原理は、国家的規模における食糧自給度を高める増産（生産）政策に集約される。生産の基盤としての土地の造成や改良といった公共事業への財政資金の投入、農業技術の研究や改良指導の態勢の整備も専ら「農産物」の生産＝使用価値の拡大にあって、その生産を担う農

家（人）についての具体的な配慮はほとんどみられべきものがない。昭和のはじめごろのこと、食糧増産に行政が力を入れているときである。業績表彰をうけたいくつかの村やむらをたづねたことがあった。村の重だった方々の苦心の話をきいたあと、学校の先生が学童の体位が下っていくという心配のあることを話されて驚いたことを覚えている。増産とは一体どういうことかという疑問がわいてきた記憶がいまなお生々しい。

ただここで農政史上とくに農民が問題にされようとした戦前の二つの例を思い出す。その一つ、それは大正デモクラシーといわれる働く人のエネルギーの昂揚の時期。農村では小作争議が激発し地主制の危機が叫ばれる時期に、耕作者の生産意欲を拘束していた小作関係（地主小作人間の干係）を近代化しようとした農政的意図——小作法案が農民政策として異色のものとして農政史の上に記録されている。

その二は、農村恐慌対策としての経済更生の政策について、ともかく農民・村の協力による経済更生なくしては果されない。そのために自村の更生から始まる一種の運動として展開されたさいに、たしかに農民が政策的に意識され、問題にされた。しかしそれは恐慌克服のための人の動員的なにおいの高いものであった。

何れにしても農民を本格的に問題にするという政策ということより、より何らか時の農業政策目標の実現のため、その方法として農家へ関心を示したということが根底にあったにすぎなくて、トータルな人間を問題にしたのではなかった。

人の問題とはまづ衣食住の問題から、生きるための総ての問題をふくんでいる。食糧増産の政策からみると、農村に封鎖的に多くの人を抱えこんできた農村過剰人口の時代では、人の問題はワキ役か別の問題でしかなかった。政策当局からみて公の政策（生産）が個人としての私の生活に優先し、農家の私経済のなかにまで「経営（生産）主・生活従」の錯倒した考え方を導き入れ、しかもそれが農村では、地主制や村落共同体の農村の人間干係によって現実に支えられてきた。

本来人間はまづ自らのために生きるという本能は不動であり一切の出発点である。上からの農政のタテマエの如何にかかわらず農家は生きる原点を崩さない。外圧が強ければ自衛を考える。村落共同体には生活防衛という結束の強みがある。共同体は政策を支える機能をもってきたが、本質的には農家生活を支える組織としての強靱さをもっている。こうしたことを考えると、農民個人を抽象しては考えられないで村落集団の中に包摂されている個人こそが実相だとみられる。生きている農民の生活は増産政策の正史の上にはあらわれない。

農業の発展のなかで、いくつかの生活に根ざした農民的知恵・思考がみられる側面をあげることができる。たとえば、農業技術についてみても、政府の増産勸奨にもかかわらず、手間のかかる増産農法とか、生産危険をはらんだ品種の導入については、すこぶる用心深い態度をとってきている。生活者の側からは、労働負担を軽減するという点で農具などの省力農法や、増収と同時に作り易いものを選択するという民間の農法に関心をもつことをみてもわかる。(「農業技術」第27巻、第9号、〔農業技術 - その戦前と戦後について〕)生活の面においても同様、吉凶禍福といった長期的生活循環から起る事件に備えての相隣扶助の知恵も、村落社会の人間干渉、個人の生活を支えてきている。

農村の生産と生活を包んだ農民の生活方式といったものが伝統としてあるのではないか。それは科学的分析にたえるものというより、トータルな人間の生活の永続のなかから生み出されてくるものというべきものである。その実体は村落共同体といわれる「むら」をみるとよくわかるように思われる。農民の生活の研究と対象を個人をふくむ社会(むら)におくというのは、そこに生活の実態があるという認識につながっているのです。この点はすこぶる重要のように思う。

3.

農業の研究や改良には、植物・動物がその環境との関連ではじめて作物・家畜として成立するという考え方が根本にあるように、農民生活もまたその自然と人間関係(社会)とのなかで理解し、改善の方策を発見していかなければならないように思われる。

農村生活の研究には生活の実態調査が大きな手法となっているようであるが、それは生活をトータル

なものとして理解し、解析するためのものであり、また生活の構造的な研究という手法も、生活全体とそれを構成する諸要因との関連を問題とするのであろうが、個人生活の解析のみでは農民生活の全貌をつかみ難いという、農民の生活方式がそこにあるからであろう。それにしても研究には全体を研究の目的にしたがって一部抽出したり、一部切断するという過程をふくむが、それを生活としての生活活動の全体として再構成することは容易なことではない。生活とか人といった人文には、現在の問題であるにしても、史点たとえば生活の連続の上での変化的要因についての比較法的視点が大切になってくるように思う。のみならず情感をふくめた人間生活となると農学のみならず社会学から極端ない方をすれば文芸的叙情の手法をも借りねばならぬこともあろうし、民俗学的知識を必要とする場合もある。たとえば「土」、「日本農民史」はこのことを教えてくれるのではなからうか。また「農民生活の伝統」(和田伝)などもその一つ。それは生活の論理でなくて生活の方式といったもので、現に農家生活の中で生きている伝統の叙事であり、叙情の文でもある。

もう一つ、農村生活についてかつては「都市対農村」といった比較においての農村的な生活実態を明かにするといった視点もあったが、戦後において国民の生活方式との関連においていえば民族生活の基盤・その原型としてみようとする戦後の視点が新局面として出てきている。たとえば「菊と刀」につづく外からみる日本人の生活態度とか思考方法についての多くの業績や、部落・むらに日本人の生活の原点をもとめる発想(きだ・みのる)や、日本人の精神構造の原型をムラの拡大にもとめようとする業績(神島二郎)を発端として、大きな拡がりをもってきている。それらの根底には柳田民俗学といわれる民俗資料の大いなる蓄積がエネルギーとしてあることはいうまでもない。こうした民族比較には民族生活のなかで変り難い伝統の、個有の「生活方式」"Way of life"が問題の核となっているようである。しかもそれが農村に原型的にあるという見方が強い。

かつて十数年前、3ヶ月にわたってアメリカ農村を訪ねまわったとき、アメリカ文明と文化とを支えているものは何だろうかという課題、とくにアメリカの生活方式の原型が農村にあるのではないか。それが日本の生活方式とどのようにちがっているのか

という興味にとらわれたことがあった。長い間の生活体験や知見のなかから、家族とむらから離れては農村(民)生活を理解しがたいその生活方式は、それが封建的とか前近代的とかいわれるにしても、形を変えて日本の社会に、集団に根強く実存している。見方を変えると、たしかに農村の社会生活が日本文化の根底にある(きだ・みのる)ように思える。むらにみる共同体的性格は、よく調べてみると、西欧の個人主義を基調としての相互主義的連帯の生活方式とは原理をこととし、東南アジアの生活方式と相似たところをもっているように思われる。

農村生活を理解するには以上のような拡がりの一面をもっているように思う。例えば私生活の社会的局面という拡がりや解すべき問題である。

4.

われわれは戦前に農民の生活は都市と農村の視点から、農村生活は、それが自給的色彩の強い点、ある意味で生活についての価値観の相違といった問題、あるいは生活程度のちがいがいったことがあって、根本的に異質の原理があったかどうかは別として、都市生活とは区別して理解できるほど両者の間に切断があり断絶があり異質があった。それを可能にしていたのは何かという点は、さきにもべた生産の自給をふくめた閉鎖的なむら社会での伝統的、習俗社会の生活様式のちがいが関連してきている。個人経済においても、農村では生産と家計とが融合しているくらし方が、経営も「家族的労作経営」(横井時敏)という非営利的な経営であると理解されていた。

戦後の農業は、経済復興 → 成長と経済が大きなテコとして変えられていく。経済の論理 — 利益主義、比較競争主義が、従来タダとしか評価されなかった自家労働に価値を与え、生産は商品生産のルールによって農村労力は都市へ吸着されていく。農村にとっての外部経済のインパクトは農法を変え、閉鎖的農村秩序に崩れを起し、それが生活面では都市化様式を促し、農村的な特色を退色させていく。生活白書が生活程度では格差を著しく縮小したと報告しているとおりである。ただし農業の生産は、経済白書が一貫していつづけるように低生産性で、その近代化、合理化の必要性をくり返し述べている。生活面での都市化にたいして生産面では依然一般的には零細規模を脱しないで、定着的で兼業化のみが拡がって、それの上に農村住民の生活があるという

現実。こうした農業の発展型式は日本的なものときえいわれる(トレーシイ)ほどに定着しかかっているのは、そこに農民的というか日本人の生活方式が、経済論理とは別に実存し、伝承されているのではないかということを想うのである。

こういう考え方があるのではないか。戦前までの日本の農業・村・民には、さきにもべたように、国益政策(生産)優先で、私益(生活)は従といった考え方が、とくに政策側に強かったが、戦後においては、生活が主で、生産が従、例えば私生活優先に一変する。その転換が経済を軸として旋回するが、生活方式は、永続的に平穩、安定の人間関係の共同体の生活原理に波瀾を起すような経済原理がまっすぐには入ってこない。入りにくい。そういう生活方式が農業・村・民を変容し変貌させるといわれながらも、まだ変らぬ一面をもつて、単眼では見透せぬ複雑なる様相を呈してきているのではないか。われわれは農業・村・民の変化を追う側面の多くの業績を知らされているが、変化せぬ生活者の精神的側面もみのがすことが出来ないように思う。精神といい、考え方といって、それは抽象であるというわけにはいかない。物象のみが現実であるという考え方では農村生活は理解すらし難い。物象は急変するが、生活の考え方は本能的に持続的側面をもっている。この二つがからみ合って生活があるというように考えるのは不当であろうか。現実には変動の要因としての経済原理が、生活原理の上になつて零細農家をどのように変えていくかという関連も軽視できない問題である。それには生活者についての深い洞察がいるのではなからうか。

ここで二つの生活についての問題を掲げる。

その一つは、生活の永続性のなかに内在する日常性というか、安定的なサイクルの問題である。それは衣食住の形は変わっても、われわれの生活の再生産を支える方式はそれほど変るものではないという不変的側面があることである。

考え方にもよるが、一日24時間を仕事、家事、食事、睡眠、娯楽、休養など平面的な生活行動に配分してみると、業種によって若干のちがいはあるが一般的には甚しいちがいはない。しかも、短期間とその配分が変るということも少なく、生活にリズムがある。われわれ私生活には変動よりも安定とリズムを求める生活態度があるという面がある。

ただ仕事の種類とか娯楽休養の方法といった生活

の内容様式になると時代的に変化があり、それが生活の質的な変り方、変貌というように受取られることがある。たとえば、農村の生活で、野良で仕事の大半を過していた時代と、出稼ぎで兼業職場で働く場合の仕事とはちがいがあがる。行為領域が変わるし、そこから与えられる所得も変わる。しかし生活の拠点は村におくし、家庭やむらの自然伝統の秩序にたいし、時にはその拘束から離れようとしながらも、無意識的にあるいは感覚的にそれに依存しているという状況も多い。

ともかく生活様式から意識まで変わったように外からはみられても、その変化は永続的でなく、何らかの安定性を求め、生活の行動の側面を安定化し日常化するという復元力が内在しているようにさえ思える。われわれが生活の変化を問題にしているときには、変化そのものを追及することもあるが、また変化の過程をおえて日常化した生活内容を、それ以前の日常化した生活内容と比較しながら追及することもできる。前者は生活者の主観、個別の問題であるが、後者は平均値的または類型的な問題の扱い方となる。こうした生活の変化の過程を通じて農村社会生活が何れにその新しい安定を求めることができるのか、またその可能性はどうかという問題が変化の時代といわれる現代の興味の対象となる。

5.

もう一つの問題。それは農村生活の伝統、農民生活を支えてきた家族、村落の共同体的環境が、個人の自立化意識の高まりのなかでどのように変わっていくのか、どのように変えようとしているのかという問題である。

すなわち一方で血縁、地縁の結合をベースとしているむら共同体の自衛的機能の外に、経済発展にともなう、それをこえた新しい職業、職場における人々の機能的な結合が、新しい生活防衛の機能を内在成長させてきている。それが前者のゲマインシャプ的結合をどのように変えるかは、農村生活にとって重要な問題である。

血縁的、むら共同体は経済的にみると、農業の低生産性と農耕活動の同質性にもとづく点があるとすると、兼業化による経済生活の都市化や個人的経済格差が生れてくると、生活共同体が崩解するといわれる。経済的発展による生活の近代化が共同体を崩解に導くという西歐的、一般的な論理と発想とは、

未だ充分にわが国では論証され、検証されていない点で未知の分野でもある。

しかし共同体的連帯が変容しつつ、新しい連帯組織を生んでいくという点で、職場での組合や組織は、新しいものでありながら村落共同体的な性格を内在しているということがいわれる。そうだとすれば、明らかにそこには日本人の生活方式が共通の基盤として生きつづけていると理解されるのではないか。

もう一つ村落の連帯との関連でわれわれの注意をひくのは、新しい地域社会に生活防衛をふくむ生活連帯の拠りどころを求めるという意識の成長をみのがすことが出来ないように思うことである。

たとえば、市町村という地域社会に職業をこえた自治体としての住民の生活をまもるという連帯感の新生である。農村の共同体に比べて、地域的に広域で、職業的区別をこえた市民(住民)としての生活をまもる上での新しい連帯が求められてきている。とくに公害から生活をまもる市民運動は地域住民が拠点となることがある。また市町村自治体が住民の健康、衛生、その他福祉といった人間の生きる上での基本的な行政機能を自治体活動として進めていく過程で、共同体意識を高めていくし、教育活動もその一翼を荷うことが多い。それは村落共同体的生活の否定の上に成立しているのか、そうでなくてその基盤になった、その連続の上での転生とみるのが当をえているのか。

とにかく、人間生活には一面経済活動にみるように、利益を追ってそのために組織を拡大していく能率主義の一面が生活の規模と内容を大きくするが、同時に緊密なる人間関係の中で安定を求めようとする不断の人間の欲求がある。共同体的情感が求められるのも人間の生活原理にもとづくが故に不動であるのではないか。農村ではそれが家族、むらのところで定着していたが、戦後において、そこで果されない新しい生活についての問題が、拡大した新しい地縁の社会に生活の拠りどころとしての機能を求めつつある。市町村は権力機構の底辺であるが、また住民の参加できる身近かな自治、共同の組織機構としての役割を新生させるという点に注目する必要があるのではないか。農村生活の変貌はこうした問題とは決して無縁なものではないように思うのである。

6.

生活とは微小で、弱いという考えがあるとすれば、何か大なるもの、システムとか制度が優越しているという制度信仰的なものがあるのではないか。生活

はまさに変化の起爆力でもあるが、変化を日常化し安定させる安全装置でもある。活動のエネルギーのもととなっている生活についての認識とその復権に、生活研究はつながっているように思う。その蓄積を期待しているのである。

〔資料〕 昭和47年度国民生活白書より転載

主要耐久消費財の普及率

(単位:%)

区分	品目調査年月	洋	テ	カ	ス	テ	ビ	オ	カ	自	乗	ラ	電	電	電	ガ	ス	ル	応	電	ガ	ス	食	じ
		だん	レ	テ	テ	レ	ノ	ル	メ	転	用	バ	冷	洗	ソ	ス	ト	グ	セ	こ	わ	ス	セ	た
		眼	ビ	レ	レ	ブ	ン	ガ	ラ	車	イ	庫	たく	う	ト	イ	ラ	接	た	か	ス	セ	ゆ	
		手	ビ	レ	レ	ド	ノ	ン	ラ	車	ン	庫	く	じ	ス	ブ	ム	ト	た	か	ス	セ	ゆ	
全世帯	40.2	67.2	90.0	-	13.5	14.6	3.2	11.0	49.4	73.1	-	-	51.4	68.5	32.2	14.0	37.7	-	-	57.8	-	16.2	-	
	41.2	-	94.4	0.3	16.7	17.9	4.2	13.3	52.9	-	12.1	-	61.6	75.5	41.2	15.2	46.8	2.0	14.1	63.9	14.3	21.3	13.6	
	42.2	77.3	96.2	1.6	19.8	22.5	4.8	14.7	57.3	71.8	9.5	6.7	69.7	79.8	47.2	16.4	53.0	2.8	16.3	69.3	16.7	26.1	18.2	
	43.2	80.0	96.4	5.4	24.1	24.5	5.2	15.9	59.8	70.5	13.1	7.3	77.6	84.8	53.8	17.5	62.9	3.9	17.8	74.7	21.4	32.0	21.0	
	44.2	83.1	94.7	13.9	27.3	28.6	6.1	18.0	62.7	67.8	17.3	9.8	84.6	88.3	62.6	17.7	68.9	4.7	19.1	76.1	28.6	38.5	23.9	
	45.2	85.7	90.2	26.3	31.2	30.8	6.8	17.4	64.1	67.1	22.1	11.7	89.1	91.4	68.3	18.7	79.1	5.9	22.6	81.4	37.4	44.5	27.4	
	46.2	87.6	82.3	42.3	33.9	33.4	7.3	20.0	67.0	66.8	26.8	11.4	91.2	93.6	74.3	19.4	82.0	7.7	23.8	83.0	46.0	48.7	29.4	
47.2	91.9	75.1	61.1	40.4	38.1	8.6	21.5	69.8	71.0	30.1	12.5	91.6	96.1	79.8	20.8	84.9	9.3	24.8	88.2	50.4	56.9	32.9		
農村	36.2	45.5	28.5	-	-	-	-	1.8	18.0	89.8	-	-	2.5	14.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	37.2	42.9	48.9	-	-	-	-	2.5	21.4	89.3	-	-	4.8	22.9	2.6	7.7	-	-	-	23.9	-	-	-	
	38.2	46.3	69.0	-	2.1	-	0.4	3.0	24.3	88.2	-	-	8.5	32.0	5.3	12.1	-	-	-	31.4	-	-	-	
	39.2	46.3	81.7	-	3.4	2.9	0.3	4.3	23.9	85.6	-	-	14.5	47.0	6.9	1.3	11.2	-	-	28.6	-	3.2	-	
	40.2	53.9	89.2	-	5.0	6.8	0.5	5.9	29.7	84.2	-	-	25.7	58.6	10.6	2.8	19.4	-	-	37.4	-	6.3	-	
	41.2	-	94.1	0.4	5.5	8.1	0.9	5.0	31.1	-	8.7	-	36.6	68.6	15.6	3.5	25.8	0.4	3.9	43.9	6.5	8.0	3.7	
	42.2	64.6	94.9	0.6	9.2	11.9	0.8	7.7	38.7	84.8	6.6	8.0	49.3	75.7	21.9	4.0	34.3	0.3	7.2	52.7	7.5	14.5	7.3	
43.2	71.1	96.6	2.6	13.4	13.7	1.1	8.8	42.6	81.8	11.4	7.8	68.3	83.9	30.5	4.0	46.9	0.4	9.1	62.4	10.0	19.3	9.5		
44.2	74.6	95.7	6.2	15.8	18.0	1.1	10.3	45.1	86.1	14.5	12.9	63.6	86.4	37.5	5.9	57.4	0.4	11.8	64.6	16.6	26.6	14.4		
45.2	79.1	91.6	18.1	18.6	18.9	1.1	11.1	45.3	81.4	22.4	18.0	83.1	90.6	48.3	7.0	69.7	0.7	14.4	73.2	24.8	33.9	15.8		
46.2	80.8	85.0	31.1	21.9	23.8	2.1	14.6	48.2	79.3	30.0	19.5	87.7	93.4	57.2	6.7	75.1	1.0	16.3	76.6	34.6	39.4	18.2		
47.2	88.5	78.4	50.7	27.3	28.6	2.9	16.1	53.4	82.9	34.1	22.8	87.8	96.3	64.4	7.7	81.0	1.1	17.4	86.8	34.2	48.1	22.7		
非農家	40.2	72.9	90.3	-	17.2	17.9	4.6	13.2	57.8	68.4	-	9.1	62.4	72.7	41.4	18.8	45.5	2.0	16.5	66.6	-	20.4	16.2	
	41.2	-	94.6	0.3	20.2	21.0	5.2	15.9	59.7	-	13.2	-	69.4	77.7	49.2	18.8	53.4	2.5	17.4	70.1	16.7	25.4	17.1	
	42.2	81.7	96.7	2.0	23.5	26.2	6.3	17.1	63.9	67.2	10.6	6.3	76.9	81.3	56.1	20.8	59.6	3.7	19.6	75.2	19.9	30.2	22.0	
	43.2	82.9	96.3	6.3	27.5	27.9	6.5	18.2	65.4	66.8	13.7	7.1	82.2	85.1	61.4	21.9	68.1	5.0	20.6	78.7	25.1	36.1	24.8	
	44.2	85.4	94.5	16.0	30.5	31.5	7.5	20.1	67.6	62.8	18.1	9.0	88.2	88.9	69.5	21.0	72.1	5.9	21.1	79.3	31.9	41.4	26.5	
	45.2	87.5	89.8	28.6	34.6	34.1	8.4	19.1	69.3	63.2	22.0	10.0	90.8	91.6	73.8	21.9	81.6	7.3	24.8	83.6	40.9	47.5	30.5	
	46.2	89.4	81.7	45.2	37.1	35.9	9.7	21.4	71.8	63.5	26.0	9.3	92.2	93.7	78.7	22.7	83.8	9.4	25.7	84.7	48.9	51.1	32.3	
47.2	92.7	74.3	63.7	43.6	40.5	9.9	22.8	73.9	68.0	29.1	10.0	92.5	96.0	83.5	24.0	85.9	11.3	26.6	88.6	54.3	59.1	35.5		
人口50万人以上の都市	36.2	63.9	62.5	-	3.7	-	2.7	8.0	49.2	67.8	-	2.8	17.2	50.2	15.4	13.4	7.7	0.4	12.0	-	-	-	6.2	
	37.2	66.2	79.4	-	7.2	5.4	3.3	9.8	51.8	68.3	-	5.1	28.0	58.1	24.5	16.9	15.2	0.7	14.4	56.2	-	-	9.9	
	38.2	70.2	88.7	-	10.8	9.0	3.7	12.1	56.4	68.0	-	6.1	39.1	66.4	33.1	20.0	28.6	1.3	15.9	64.7	-	-	12.4	
	39.2	74.1	92.9	-	13.4	13.0	4.1	13.6	58.0	65.1	-	6.6	54.1	72.2	40.8	21.3	40.6	1.8	16.5	63.4	-	-	17.0	
	40.2	77.3	95.0	-	20.1	20.2	5.8	15.4	64.8	57.8	-	10.5	68.7	78.1	48.5	23.4	49.9	2.6	18.8	70.7	-	-	24.2	
	41.2	-	95.7	0.4	23.9	24.1	6.9	17.1	65.8	-	13.5	-	75.1	81.8	55.3	24.5	57.3	3.2	19.1	74.2	19.8	28.8	20.2	
	42.2	83.9	97.3	2.2	25.8	27.3	6.8	18.4	67.4	68.0	11.0	7.1	80.7	84.0	59.8	23.8	62.6	4.3	21.3	78.5	22.5	31.6	23.9	
	43.2	84.1	97.4	6.7	28.9	29.1	7.0	18.4	66.4	67.2	14.6	7.1	84.5	86.7	63.0	23.6	69.4	5.6	21.3	79.8	26.5	37.6	26.2	
	44.2	87.0	95.1	14.6	32.5	32.0	7.9	21.0	69.8	62.1	18.6	9.2	90.1	89.8	70.3	23.8	75.0	6.5	22.5	82.6	33.9	43.2	28.3	
	45.2	88.2	90.1	30.4	36.6	35.3	9.1	20.8	72.1	62.1	22.6	9.5	92.5	92.1	75.4	24.8	82.7	8.4	26.1	84.7	42.7	49.1	32.7	
46.2	90.8	82.2	47.1	38.7	36.9	9.4	22.3	74.7	62.1	25.8	8.5	94.5	94.3	79.9	24.9	83.9	10.2	27.1	85.2	52.0	52.9	34.5		
47.2	94.0	75.1	65.3	44.9	42.2	11.3	23.7	76.8	66.3	29.3	8.8	93.5	96.3	85.2	26.3	85.3	13.0	27.7	89.8	56.4	60.5	37.1		

(備考) 1. 当庁「消費者動向予測調査」による。
 2. ※ガス・電気ストーブを含む。
 3. 42年2月以降の乗用車にはライトバンを含まない。
 4. 41年2月のガス湯わかし器には電気湯わかし器を含む。